
紅月は女神の祈り

中原まなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅月は女神の祈り

【Nコード】

N3494Z

【作者名】

中原まなみ

【あらすじ】

女神の使者として生まれし少女は、やがて、己を探す旅に出る。それはいつしか、世界の運命を大きく変えようとしていく――

紅き月と少女の奏でる、異世界冒険ファンタジー。
自サイトのをこちらでアップしていきます。

原稿用紙1500枚、手元では完結済みです。

紅き月 天空くソラ>に掛かりし刻

証を持ちて生まれし者

汝

月の子也り――

夜の帳が街に下りる。

ルナ大陸でも比較的都会にあたるここ、セイドウール・シティは、それでもまだ闇にその場所を完全にあけ渡すことはなかった。

うすぼんやりとした街灯を眼下に見つめ、赤き少女は窓際の椅子に腰掛けていた。

小柄な少女だ。年のころなら十四、五歳といったところだろうか。動きやすそうな服や、首からぶら下がった真紅のペンダントも、どこことなくぐはぐで――まだ、幼さを引きずっている。

だが、それよりもまず目を引くのは少女のその髪と瞳だろう。

短く切り込まれたショート・ヘアと、少し猫目気味の大きな瞳。

そのどちらもが、真紅。

彼女が首から下げているペンダントのそれと、同じ色なのだ。

肌の色からすると黄色人種だろうが――その艶やかな髪と瞳は、あきらかに黄色人種としての特色ではない。

色素異常。そして、その首から下がっているペンダント――いや、正確に言うなら、ペンダントの石。真紅の石。それらが意味するのは、この大陸ではたった一つしかない。

すなわち——……

「あたしは……」

その少女が、軽く頭を上げた。頭上にあるのは、夜空。そして、その中に浮かぶ、少しかけた円——月。

「あたしは女神様の……」

少女の赤毛が、風に揺れる。

「おもちゃじゃ……ない」

少女の赤毛が、風に揺れる。

少女の赤眼が、月光に揺れる。

——夜の帳が、街に下りる。

緑が濃い。柔らかく降り注ぐ太陽光は、木々の合間からまるでレ
ースのように肌に模様をつけていた。

それにしても――

一体何匹目なのだろう。

エリスはそれを思うと嘆息を漏らした。二十三まで数えて、そこ
からは数えるのをやめた。数えれば数えるほど、疲れが増す気がし
たからだ。

斬り倒したばかりのそれ――見た目は狼、しかし鱗付きの魔物――
ーを見下ろして、エリスは右手に持っていた剣を振った。剣につい
た血がびゅつと飛ぶ。けれど飛びきらない血油がぎらぎらと気持ち
悪い。血の臭いはとくに感じなくなっではいたが、やはり胃のあ
たりがむかむかとした。

――まったく、今夜の剣の手入れはいつもの倍はかかるだろう。

「あーもー、ちょーむかつくう！」

横手からの甲高い声に、エリスはもうひとつ嘆息を追加した。こ
の台詞は十七回目だ。こっちは倒した数より少ないので覚えていた。
それにしても、いいかげんうざったい。

「アンジェラー。だまってよもー。あんたの声でいらいらする」

「だって！　ちょーうざいよ！」

「だからそれはあんただって」

こちらを振り返ってくる少女に、エリスは半眼を投げた。ぷつと
頬が膨れているのは拗ねている証だ。顔を真っ赤にして、息も上が
っている。

紫色の瞳に、腰まである黒くつややかなウェービー・ヘア。エリ
ス自身と違って白人で、アンジェラの名前のとおり天使のような外
見だ。黙っていれば可愛いのに――とは思いますが、悔しいので一度も

本人に言った事はない。幼なじみという照れくささもあるが。

「だって！ 多すぎ！ 何匹倒したのよう、もう。少なくとも三十は倒したわよう……」

「……三十超えてたか……」

再度、溜息。溜息ひとつに幸せがひとつ逃げていく、と聞いたことはあるが——だとしたら、あたしはこの瞬間にいくつ幸せを放り投げたのだろう、とエリスは苦笑した。

「ねえ、エリスう。何でいきなりこんなことになってるわけ？ ここ」

今さら聞いてくるアンジェラに、エリスは頭痛を覚えた。

「あんた……今まで何も知らずに戦ってたわけ……？」

「うん」

あっけらかんと頷くアンジェラに、エリスはこめかみをもんだ。

「……さつき、入るとき言われたでしょうが。大陸全土における異常現象のため、魔物が大量発生しています、って」

「……そだっけ？」

「聞きなさいよヒトの話！」

あまりにあまりな言葉に、思わずエリスは怒鳴っていた。アンジェラが人の話を聞き流すのはいつものことだが、自分の身が危機にさらされるような重大な内容まで聞き流してもらっては困る。

「だって、長いし。あの管理人の話」

「……ああもうー。わがまま娘！ 魔物が異常に発生してんのよ！

無駄に！ 多く！ なってんの！ 判る！？」

「そりゃ、戦いまくってるから判るけど。なんで？」

「……もーいい……」

その理由が判らないからこそ、最近大陸中で国家単位の会議が開かれているのだ。いまもその真っ最中で——エリスの両親も、アンジェラの父親もその会議に出ているはずだ。マグナータ家は騎士家系だし、アンジェラのライジネス家は男爵位を持っている貴族なのだから。しかしその一人娘がこれでは、なんともまあ——ライジネ

ス男爵は、子育ての才能には恵まれなかったらしい。

「あーもう。ほら、とっとと進むよ。ティア・ドロップ見つけてさっさと帰ろう」

「えー。せっかくここまで来たんだから、旧神殿よって行こうよー」

「だったらさっさと進めっての!」

「あ、冷たいわねえ。せっかくあんたのお仕事手伝ってあげてる私に、そういうこと言うんだ、エリスは」

「頼んでないでしょ!? あんた勝手についてきただけでしょ!?

「だって、ラスト・ミネア久々だから来たかったんだもん。でもこんな魔物多くなってるならやだー。帰ろうー」

(こんのわがまま娘……)

毒づく。アンジェラのわがままは今に始まったことではないが——こういう状況下でのそれは、普段と違って緊迫した意味を持ちかねない。魔物との戦闘。それが絶え間なく続くこの森——ラスト・ミネアの中では、ひとつのわがままからあっさり死を迎えてもおかしくはない。

「あたしは仕事なの。ティア・ドロップ二十本。とっとと見つけないといけないんだから。アンジェラ先に帰ってなさいよ、そんなこと言うなら」

「えー。やだ」

「……じゃあ黙ってついてくる!」

吐き捨てて歩き出すと、アンジェラが慌てて付いてくるのが判った。背中越しにアンジェラの気配を感じながら、ばれないようにほっと胸をなでおろす。ついてきてくれないと、困る。アンジェラは確かに魔導も使えるが、この森の中でひとりであれば、ものの十分とたたないうちに死体になりかねないからだ。自分で先ほどいった言葉が頭の中をめぐる。無駄に多い。魔物。

それに——実際、助かっている。エリス一人でも、この森は危険だ。剣の腕はかなりのものだと自負してはいるが、それにだって限界はある。特にこういった対複数の戦いの場合、アンジェラの魔導

はかなり役に立つのだ。

「ねー、エリスう」

とことごと付いてきながら、アンジェラが思い出したように声をあげる。

「……何？」

肩越しに促すと、アンジェラは小首をかしげて、聞いてきた。

「資金、貯まってるの？」

その言葉に――ぎくりと心臓がはねた。

「……貯まってる」

エリスはアンジェラから視線をはずすと、前を向いたまま頷いた。知らず知らずに足早になっている。かさり、かさと緑を踏む音が耳に障った。

資金は貯まっている。――もう十分なほどに、だ。

「ふーん……ホンキなんだ？」

「……当然。何よ今さら」

「……別にいい」

トーンの低くなった声が気がかりだったが、エリスはアンジェラのほうを向くことは出来なかった。罪悪感が、それを許さなかったのだ。

（……言わなきゃいけないんだけど……）

いつ言えればいい？ どのタイミングで？ しかも今さら――？

今夜発つことにしているなどと、今さら言えるだろうか。けれど、何も言わずに発つことは出来ない。それだけは絶対に出来ない。十三年間。アンジェラが生まれてからずっと一緒だった。姉妹のような関係。それなのに――

「……エリス、来るよ。もー一匹」

ふいに思考を割って、アンジェラの声が鋭くなった。緩んでいた気を引き締め、意識を戦闘モードへと切り替える。気配が――する。

「右だね……来たら、すぐ殺る。タイミング、お願い」

「オーケイ。……四、三……」

抜いた剣を握りなおす。相手に一撃の猶予も与えないで戦うほうが、ずっと勝率は上がる。そのためには、アンジェラの『能力』が役立った。

一瞬先の、未来を見る能力。

「二、一……今っ！」

「はああああああっ！」

呼気。右手にしていた剣を、真一文字に横に風ぐ。それはエリスの意識というよりは、体が勝手に行ったような感覚だった。脳で考えるよりもずっと早く、体が反応していた。エリス自身が気付いたときには、手のひらに重い手ごたえがすでにあつたのだ。

その重さにぞくりとする——ひまもなく、それはあっけなく地面に倒れた。

「うーわー……」

倒れたそれを見下ろして、アンジェラが淡々と呟いてくる。

「ねえねえ、見て見てエリスう。腕が四本もあるわよ。気色わるうーい」

それは確かに、そんな形態だった。この森に入ってから、実にさまざまな魔物を目にしてきた。小鬼から、やたらどこかい蜂から、鱗狼にアメーバー状のよく判らない魔物まで。けれどこれはまた……なんというかけつたいな魔物だ。

大まかに見れば人型だろう。しかしアンジェラの言うとおり、人間で言えば肋骨にあたるような部位から、おまけといわんばかりに腕が二本伸びている。浅黒い肌は気持ち悪さを増大させて見えた。

「私こんなの初めて見たわよ。ねえねえ、これ、なんて魔物？」

「知らない。新種でしょ？ 最近やたら発生してるらしいし」

「ラスト・ミネアでも？」

アンジェラのきよとした表情。まあ疑問としては当然だろう。『神聖たる』旧神殿が置かれた『輝ける水の森』Ⅱラスト・ミネア。そこにまで魔物が発生しているなど、今まででは考えられなかったことだ。それに付随して『新種』。けれど、事実事実としてある。

「あんたの目の前にあるのが真実。それ以外にどう説明しろって？」
逆に問い掛けてみるが、アンジェラにしたらそんなものはどうでもよかったらしい。落ちていた木切れでつんつんとその死体をつついている。

「あーやつぱ気色悪いねー。燃やしていい？ 火葬火葬。わあ、アンジェラちゃんやつさしー！」

「……あんた、それで火事とか起こさないでよ……？」

「しないわよお、私エリスほど馬鹿じゃないもん」

あつさり言うと、アンジェラは口の中で呪文を唱える。本人の言うとおりに、周りには何の被害も出さずにその死体は火に包まれた。しばらくして、燃え尽きる。

「魔導って便利だよねえ……」

思わず呟いたエリスに、アンジェラはにと皮肉な笑みを浮かべてきた。

「こんなの、子供でもできるわよ？ エリスが特別、おかしいだけ」
「うるさいなあ」

確かにこの魔導大陸ルナでは、たいていの人間が苦もなく魔導を操れる。理由はよく知らない——というかエリスにしたら知ろうが知るまいが関係なかったので学んでいない。どうせ、向き不向きがある。エリスほど『魔導』に関して鈍いのは珍しいらしいが。

「あたしは、これがあるからいいの」

剣を指して見せると、アンジェラは何もいわず肩をすくめた。そのままでけてけと歩き出す。迷路のような森だけれど、アンジェラの歩みには不安もない。それもそのはずで、この森の道は十分に把握している。

昔よく、ここを遊び場に使っていたのだ。ここ、というよりはこの森の奥にある旧神殿を、だが。そこを『ひみつ基地』に使っていた。最も、ここ数年来ていなかったけれど。

「しかし、あれだよ。こんななってるなら、もうちょい警備増やしたほうがいいよね、この森」

「私たちが出入りしてたときよりは、ずいぶん厳しいじゃない」

「あれは、ほとんどなかったも同じじゃない。そりゃ、今は一応管理人と兵士が入り口守ってるけど……あの程度じゃ入ろうと思えば入れるじゃない。これ、やばいよ？　いたずら気分で入ったら、死ぬって、マジで」

「ま、そのあたりはあとでお上に言えばいいじゃない。――と、フェアリ・ベリーとうちやあく！」

アンジェラが嬉しそうに走り出した。その先にあるのは、大きな湖だ。フェアリ・ベリーと呼ばれる湖――の、正確にはおおもとだ。セイドウール・シテイそのものが、このフェアリ・ベリーの上に乗っかっている水の都だから、ここだけをそう呼ぶのは適切ではない。まあ、そんなのは教科書で十分だろう。街の人たちも大概がそう思っている。ここが、フェアリ・ベリー。

アンジェラは湖のほとりにひざをつくと、そつと小さな手で水をすくった。のどに流し込み、大きく息をつく。

「あー、おいしいー！　生き返るう」

エリスも一度周りの気配を確かめてから、同じように水を飲んだ。疲れきった体に、ひんやりとした水の感触が心地よい。血の臭いに麻痺した鼻すら、少しずつ回復傾向にある。森の匂いがした。

「さて、と。この辺りよね？　あの似非ぺんぺん草」

「……『ティア・ドロップ』です」

「似たようなものじゃない」

「違うわい」

ぺんぺん草と形状は似ているけれど、同じにしたら薬草の面目が立たないではないか。エリスの半眼をアンジェラはあっさりと受け流すと、ほとりを歩き始める。探しているのだろう。エリスもこっそり溜息をついて、同じように探し始めた。

「ふうー。これで、二十本ね！」

アンジェラの溜息に、エリスは苦笑して頷いた。持ってきてた布

袋に最後のティア・ドロップを放り込んで、口を閉じる。結構時間はかかってしまったが、何とか見つけることが出来た。

「あとは、これを……えーと」

「ジャックさんとここに届ければおしまい」

「あ、そっか。パズーのお父さまね。そんじゃ、行く？ エリス」

「あんたが素直に帰ってくれるなら、あたしは喜んで行くけど？」

くいつと親指で背後にある建物をさしてみると、アンジェラは慌てたようにまくしたてた。

「あ、だめ。ストップ！ 先に寄っていく！ 旧神殿！」

「だと思った。じゃ、行ってみよっか。久々だし、あたしも嬉しいや」

エリスはにっと笑うと、アンジェラとともに旧神殿へ足に向けた。

ルナリット神殿。この旧神殿は、確かそんな名前だった。

最もそんな名前で呼ぶ人間は、ほとんどいない。ここは旧神殿。それでいいじゃないかというのがたいていの人間の考え方だ。エリス自身含め。

十数年前まで、ここは現役の神殿だったらしい。とはいえ新しい神殿が街中に出来てからは見向きもされなくなった。しかしそれが逆に、建物の頑丈さとあいまって『ひみつ基地』にはもってこいだったのだ。

多分、探せばまだあちこちに隠した宝物だのなんなのが見つかるはずだ。

なれた足取りで神殿内を進んでいく。ひんやりとした空気は、いつ来ても変わることがない。清浄なる神殿——ということなのだろうか。戦闘に疲れきった体には、心地よいことこの上なかった。

エリスはふと顎を上げた。高い天井に描かれた神話。

眉をしかめる。不愉快だった。

「なに、あんたまたあ？」

身じろぎしたのを見つけたのだろう、アンジェラが呆れたように言ってくる。

「仕方ないじゃん」

嫌いなものは嫌いなのだ。この神話のせいで、何度不快な思いをしたことか。

天井画には、真紅の月が描かれていた。フレスコ画——だろうか。ところどころ継ぎ目が見える。あまりこの絵の作者はフレスコ画に慣れていなかったらしい。

真紅の月と、それに重なるように描かれている裸身の女性——いや、女神。このルナ大陸を治めし月と戦いの女神、ルナ。その腕の中にいるのは、赤ん坊だ。赤ん坊の手のひらには、何か赤いものが

見えた。紅の石を握っているのだ。

「月の者、かあ」

「……うん」

エリスは小さく頷いた。剣を収め、手持ち無沙汰になっていた右手でそつと胸元のペンダントに触れる。

月の石。

今見上げていた、あの絵画の赤ん坊が握っているそれだ。紅の、ルビーにも似た色で、石の中に不思議な紋様が見える。

「紅き月、天<ソラ>に架かりし刻、証を持ちて生まれし者、汝、月の子也り——だってさ？」

アンジェラが天井画を見上げながら呟く。天井画に書かれた句を読み上げたのだ。エリスはこれ見よがしに舌打ちをした。アンジェラが眉をひそめる。

「あんた……いくらなんでも神話絵に舌打ちは、バチが当たるわよ……？」

「アイコン（聖像画）じゃないからいいの。てか、いくらでもバチもつてこい。どうせ今とそんなにかわりゃしないよ」

「……そんなに嫌い？」

「嫌い。大っ嫌い。なんであんな神話のせいでただの人間じゃないなんていわれなきゃならないのよ」

「まあ、わかんなくもないけどさ」

アンジェラが肩をすくめて、さらに小声で続けた。

「世界に危機迫らんとするとき、女神は我が子を産み落とす——」

アンジェラの小さな声が、それでもエリスの耳に飛び込んでくる。嫌な言葉として。

この言葉で、何度からかわれたことだろう。逆に言えば、エリス自身が生まれたということは、世界が危機に瀕しているらしいということになる。

月の者——女神ルナの使者Ⅱエリス・マグナータ。

「世界の危機とかいわれても、そんなもの知らないもん。あたし」

「まあねー。ま、いいじゃん？ ほっとけば。どーせ、セイドウル出ればそんな大きな問題じゃないでしょ？」

「知らない。国教に指定してるのはこの国だけだけど、それでも『大陸の女神様』だもん。割と信仰はされてると思うし」

「……そんなものなのかなあ」

アンジェラがくいと首を傾げるが、エリス自身聞きかじりだ。そんなものかどうかは——今夜からきつと、嫌というほど判るはず。

それから、会話が途切れる。お互い疲れていたし、何よりも今交わした言葉が、次の台詞を生み出せなくしていた。

無言のまま、神殿の奥へ奥へと進み——そして。

つとアンジェラが足を止めた。エリスもなんとなく同じように足を止める。

旧神殿の最奥部。女神の間——

嫌な感じがした。アンジェラはその感覚に理由をつけることはなかった。けれど、事実としてあった。嫌な感じがする——

広間に目を滑らす。あの頃とそんなに変わっていない。多少埃っぽくなって、老朽化も進んでいるだろうが、見た目には変わらない。だとしたら、何がそんな嫌な感じを生み出しているのだ——？

紅。

フラッシュのように意識に飛び込んできたそれが、視界の片隅に映っていた彫刻像だと気付くのに、数秒を要した。

アンジェラは反射的にそれをまっすぐと見つめた。

紅い月の、彫刻。細かい細工の施された、芸術品。アイコン——聖像画が現神殿に移されてからも、これだけは変わらずここにあった。昔からだ。それは変わらない、はずなのに——

（やだ。なんで……今日はこんなに気持ち悪く思うの？）

知らず知らずのうちに、喉が上下して唾を飲み込んでいた。不快感。

そして、見た。

(……!?)

思わず息を呑み、隣に立っているエリスの服を引っ張る。

「……エリス……あれ、何!?!」

「何って……彫刻でしょ? 前からあったじゃない」

「そうじゃない!」

自分でも驚くほど、声音は悲鳴じみていた。

「ちゃんと見なさいよ!」

半ば裏返った声で叫び、震える人差し指でそれをさした。

「……え?」

エリスが戸惑いながらそれを見る。そして……息を、呑んだ。

その横顔をちらりと視界に入れて、アンジェラは苦々しく思う。

ああきつと、今同じ顔をしているわ、私たち。

——ツキイイイイイツ——

「っ!?!」

唐突に響いた不協和音——そうとしか表現できない、耳鳴りではない何か——に思わずアンジェラは目を閉じた。

耳が、脳が、心臓が、痛い。痛い。

それでもよく判らない強迫観念に突き動かされるように、うつすらと目を開く。見たくない。けれど、見ないといけない。何故かは、判らないけれど。

月の彫刻。女神ルナのイメージとして彫られたそれは、ただの彫刻ではなくなっていた。うすぼんやりとした紅の光を放出し、そこから——

「……何。何か、映ってる……!?!」

エリスが疑問符をあげる。アンジェラはかぶせるように悲鳴をは

いた。

「ちょっと！ 何か出てくるわよ！？」

紅。

今度は本当に閃いたその光は、瞬間その場を飲み込んだ。そして何事もなかったかのようにそれが収まると――月の彫刻の上には、人影があった。

裸身の、女性。

金色の髪はくるぶしまで届き、エリスと同じ真紅の目は、ただ真っ直ぐにこちらに向けられていた。眩しい――と思ったのは、光のせいなのか、それともその女性自身のせいなのか、それはアンジェラには想像すらつかないことだった。

ただ、判る。見てはいけない。見てはいけなかったのだ。きっと。美しすぎるこの女性を視界に入れてはいけなかったのだ。もう、遅いけれど。

その瞬間、運命の歯車は、回り始めてしまうから――

その時、だった。

「……」

エリスが無言のまま、一歩足を踏み出した。

「ちょ……エリス！？」

一歩。二歩。三歩。――もつと。もつと。いつものように慣れた歩き方ではない、どことなくこちない人形のような歩みで、彫刻に近づいていく。いや、彫刻に、ではない。あの、裸身の女性の影に、だ。

「やだ、ちょっと！ エリスってば！」

慌ててその腕をつかむ。だが、普段では考えられないような乱雑さで払われ、アンジェラはその場にしりもちをついた。

「エ……エリス……？」

こちらの言葉は、エリスには届かなかったようだ。エリスはその女性の数歩手前で足を止めると、ひざを折った。臣下の礼のように、頭をたれる。

ふいに気付く。エリスのペンダントが――あの、紅の月の石が、ぴかりぴかりと点滅している。まるで、何かに応えるかのように。

「……ルナよ」

「――！」

凍ったエリスの声に、アンジェラは弾かれたように立ち上がった。

「エリスッ！」

悲鳴が喉をついて出た。裏返ったその声にすら、エリスは全く反応しない。走り出し、エリスへと手を伸ばす――

キィイン……

「……っあ！」

アンジェラはその場に転がった。何故？ 何故転がっているのだ

ろう――？ ただ、走っただけだ。エリスに近づこうと走って、それで――

（……壁！？）

ふいにその考えに行き着く。そう、走って、それで――弾かれたのだ。何かに。見えない何かに。

もう一度立ち上がり、今度はゆっくりとエリスの傍へ歩み寄る。けれど、やはり触れるか触れないかの位置になると、指先が何かに弾かれた。壁だ、壁がある。見えない、透明な壁が、そこにある。

エリスとアンジェラの間に。

「やだ。やだ、やだやだやだ。何よこれ！ これ以上いけないなんて、何でよ！ やだ。エリス、エリスッ！」

錯乱しかけている。自分でそう思った。けれどどうしようもない。傍にいるのに、おかしくなった親友に手も触れられない自分がもどかしくて、どうしようもなかった。

けれど、目の前の、目の前にいる触れられないエリスは、変わら
ない調子で言葉を続けた。

「――我、此处に来たり」

「だめ！ エリス、エリスってば、この馬鹿！ 聞こえないの？
ねえ！」

見えない壁をバンバンとたたいてみる。ああ――パントマイムに
見えるだろうか。パントマイムの大会があれば優勝だ、チクショウ。
何で、とめられない？

混乱した頭の中に、ふいに声が割り込んできた。

『――月の者よ』

目を、見張る。誰の声だ――？ この場には今、エリスとアンジ
エラ自身しかいない。そのどちらの声でもない。だとしたら、可能
性はひとつ。

アンジェラはぞっとした表情で人影を見た。月の彫刻の上に浮い
ている、裸身の女性。

「……はい」

エリスが、しっかりと頷いた。ということは、この声はエリスを
呼んだのだ。目の前のあの人影は、エリスに話し掛けている。

『時、来たれり。』

汝、我が元へ来る事を拒まぬか……？』

淡々とした声。そこに意思などない。問いかけではない。確認で
しかない。ひんやりとした、そう、この神殿内の空気のような声。

「拒みません。我が主、ルナよ」

（ル、ナー――！？）

薄々感づいてはいた。けれど、エリスの口からその言葉が再び発
せられたとき、アンジェラの体に衝撃が走った。

大陸を治めし月と戦いの女神、ルナ。それが、そこに、いる――？
『なら、来たれよ。我が子よ。汝、月の子也り――』

ぞくり。

全身の毛が、粟立つ。何も考えられない、何も考えてはいけない。そんな気がした。震える指がカタカタと耳障りな音を発していた。それから気付く。いつのまにか、床にへたり込んでいたらしい。

カタ。カタ。カタ、カタ、カタ……

爪が、冷たい床を同じリズムで叩いていた。耳障りだった。けれど、願った。もっと、もっと大きな音なら良いのに！ この声を掻き消してくれば良いのに！

しかし、そんなささやかな抵抗も願いも、意味はなさなかった。エリスの背中が、しっかりと、言葉を発した。

「――はい」

紅。

三度目の光が満ちた。それは、先ほどまでと違って、エリスのペンドアントから発せられたものだった。

そして、それが収まったとき――人影はもうそこにはなかった。

沈黙。

「……え？ あ、あれ？」

その沈黙を割ったのは、なんとも間抜けな声だった。エリスだ。さっきまでのおかしなエリスではない。いつもの、エリスの声！

「エリス……！」

アンジェラは立ち上がった。途中で一度かくんとひざが折れたが、無理やり立ち上がる。

冷たい床を蹴って、ぼんやりとしたエリスの腕にしがみつく。しがみつけた。触れられる。大丈夫。

「エリス、エリスあんた、大丈夫!？」

「……何が？」

訳が判らないと目を白黒させているエリスに――どっと力が抜けた。再び床にへたり込む。

「うわっ、ちょっとアンジェラ!? 何、どーしたってのよ。疲れたの!？」

「……」

無言で首を振る。エリスは何も覚えていないのだ、きっと。

「……後で、話す。だからとりあえず、ここ、出よう」

薄い息の間から言葉を吐き出すと、エリスは困惑した表情で頷いた。

エリスに支えられて立ち上がりながら、アンジェラは混乱した頭を整理するのに必死だった。

少しだけ、はつきりしていることはある。

操られたのだ、エリスは。

女神、ルナに。

そして、女神は言った。

時、来たれり——と。

アンジェラの様子が、どうにもおかしい。

拗ねているのかなんなのかは知らないが、無駄口ひとつ叩かずに、もくもくと前を歩いている。時折出てくるはずの魔物には、多分彼女自身の能力で先見したのだろうが、出てくる前に魔導を放っている。おかげで行きとは比べ物にならないほど、ラスト・ミネアの道は楽に進めたが——なんだか怖い。それに、多少の不安感がある。

アンジェラの使う火や土の魔導は、正確には確か法技と言う。それは魔導師としての能力だ。それはいい。使いすぎるとめまいや貧血に似た症状を起こすこともあるらしいが、そのあたりの加減はしているだろう。

だが、先見の能力。これは、法技ではない。限られた能力者——魔女、特殊能力者——が扱える『魔法』だ。アンジェラもまた、ただの人間ではないのだ。

その魔法は、アンジェラ自身そんなに操れるものではないらしい。自分自身によほどの危機が迫ったときや、身近な人間の身が危険に準じたとき——あるいは、神経が張り詰めているときに唐突に『見える』というのだ。行きはそれほどこの能力は発揮していない。それなのに、今は次々と『見て』いるのだろう。よくない兆候とも言えた。身の危険か、それとも、アンジェラの神経が過敏になっているのか——

いいかげん黙っていることにも疲れて、エリスは口を開いた。

「ねえ、アンジェラ。さっきからなに怖い顔してんの？」

「……知らないって気楽でいいわよね」

刺々しい。振り返りもせずに言ってくるアンジェラに、エリスはさすがに苛立って声をあげた。

「ちよつとなによう、つかかるなあ。あたしが一体何したつてのよ!？」

「……操られた」

ぽそりと言ってくるアンジェラの言葉に、エリスは目を瞬かせた。

「……は？」

——その時、ふいに殺気がふってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494z/>

紅月は女神の祈り

2011年12月13日01時02分発行